2025年4月27日 主日礼拝メッセージ

聖書:使徒の働き18章23～28節
説教:アポロの働き

はじめに
　パウロは第二回目の伝道旅行を終えて、母教会があるアンティオキアでしばらくからだを休めることにします。使徒の働きにはいちいち細かいことは書いてはいないけれど、パウロの他の手紙には、船が難破して一昼夜、海の上を漂ったことがあったこととか、食べ物もなく、寒さの中に裸でいたことさえあったと書かれていて、それを読んだだけでどれほどたいへんだったか想像できる。パウロは疲れていました。でもいまもう一度力をいただいたパウロはまた宣教の熱意に燃えて三回目の旅行に出かけることにします。それが23節からはじまります。これまでは、新しいところに出かけて福音を語り、教会を建てていくというスタイルでした。でも今日の箇所では「すべての弟子たちを力づけた」ということしかなくて、その代わりにアポロという人が登場する。すでに建てられている教会が成長し、そこから福音を語る者が新たに起こされる。宣教の第二世代を迎えてきていることがここからわかります。今朝は、アポロという人を通して神の働きを見てまいります。

１　アポロ
１）アレクサンドリア生まれ
　アポロの紹介はこのようになっています。24, 25節。「さて、アレクサンドリア生まれでアポロという名の、雄弁なユダヤ人がエペソに来た。彼は聖書に通じていた。この人は主の道について教えを受け、霊に燃えてイエスのことを正確に語ったり教えたりしていたが、ヨハネのバプテスマしか知らなかった。」
　みなさんの聖書の後ろに、パウロの第三次伝道旅行の工程が記されている地図が載っています。その地図を見ると、真ん中の地中海をはさんで南側にエジプトがあります。そのエジプトの少し左側、つまり西側にアレクサンドリアという地名があります。聖書の時代、アレクサンドリアは学術の町で、膨大な資料を収めた図書館があったことで有名でした。その町にも、クリスチャンが来て福音を教え、宣べ伝えたのでしょう。アポロがあるときこの福音を聞いてクリスチャンとなり、聞いて終わりではなくこんどは自分が外に出て行って福音を語る、宣教師となっていきました。

２）霊に燃えていた
　そのアポロは「霊に燃えてイエスのことを正確に語ったり教えたりしていた」とあります。「霊に燃えている」とはどんなことなのかと考えます。元気とか、熱心とか、ばりばりブルドーザーのように突き進むとか、そんなエネルギーにあふれた姿でしょうか。たしかに人の目にはそんなふうに見えたかもしれない。でも肝心なのは、だれが霊を燃やすのかです。たとえば学校のクラスには、積極的に発言したり行動してよく目立つリーダーになるような仲間がいたものです。ああいう人が霊に燃えた人と言うのかと思ったりします。アポロも、声は通るし話しはうまいしという生まれつき持っていた性格とか能力というものがあったことは確かです。でも大切なのは、一人の能力ではなくて、神がこの働きを支えていたということです。ちょっと変な言い方になりますが、神がアポロの霊を燃やしていたということでしょう。では、アポロはそのことに気がついていたのかどうか。それが今日のテーマにもなっていきます。

３）ヨハネのバプテスマしか知らなかった
　プリスキラとアキラはエペソにとどまって教会の働きを助けておりました。あるときこの二人はアポロの説教を聞く機会があり、肝心なことが抜け落ちているのに気がついた。当時、しっかりとした神学校があるわけではないし、キリスト教の教理とはこういうものですと、まとまったものがあったわけでもありません。なにしろキリスト教はまだはじまって日が浅く、口伝えで福音が教えられる状態です。聖書と言っても旧約聖書だけで、新約聖書ができるのはずっと後のことです。ですから、どうしてもこういうことは起きたのでしょう。ではプリスキラとアキラは、アポロの中に何が欠けていると気づいたか。「ヨハネのバプテスマしか知らなかった」とあるので、これに関係することのようです。
　ではまずヨハネのバプテスマとはなにか。そこからアポロに欠けていたものが何かを考えます。このことについては洗礼者ヨハネ自身が語っています。マタイの福音書3章11節。「私はあなたがたに、悔い改めのバプテスマを水で授けていますが、私の後に来られる方は私よりも力のある方です。私には、その方の履き物を脱がせて差し上げる

資格もありません。その方は聖霊と火であなたがたにバプテスマを授けられます。」

自分の罪を告白するものはヨルダン川の水にからだを沈めて、水でバプテスマを受ける。これがヨハネがしていたバプテスマだった。イエスもヨハネからバプテスマを受けられましたし、私たちも罪を告白して水でバプテスマを受けました。アポロは、このヨハネのバプテスマについては語りました。そこまでわかりました。

２　聖霊

１）その方が授けてくださる

アポロは聖書に通じ、主の道について正確に語り、教えていました。旧約聖書に記されている救い主とは、エルサレムで十字架の死を遂げられて三日目によみがえられたイエス・キリストであること。イエス・キリストこそ罪の身代わりとなって十字架の贖いを成し遂げくださったこと。これがアポロが語った主の道の内容です。

しかしプリスキラとアキラは気がついた。もう一つ大切なことが欠けている。洗礼者ヨハネはこう語っていた。「その方は聖霊と火であなたがたにバプテスマを授けられます。」

主を信じたものは罪赦されて神の前に正しいものとされて義とされる。それは確かだけれど、もう一つ大切なことがある。主が、救われた者に対して聖霊を授けてくださる。アポロはそれを知らなかった。それでプリスキラとアキラはわざわざアポロを脇に呼んで懇切丁寧に教えなければならなかった。

２）主のよみがえりと聖霊

こんなことを言うと、ある方は疑問に思うかもしれない。「聖霊は、グリコのおまけのように救われたなら必ずついてくるものなのでしょう？だったら、わざわざ教えなくてもいいのではないか。」いまわかりやすいように、こんな言い方をしてみましたが、聖霊というとなんとなくあまりよくわからないという印象がどうしてもつきまといます。でも聖霊はほんとうにおまけなのか。

そんなときペテロがこう語っていたことを思い起こします。使徒の働き2章32，33節。「このイエスを、神はよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。ですから、神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです。」

先週、主のよみがえりを覚えるイースター礼拝でした。よみがえられたイエスはトマスに言われました。「見ないで信じる人たちは幸いです。」それで私たちは、よみがえられた主イエスを肉の目で見ることはなかったけれど、聖書に書かれていることばを信じて救われました。

でも、疑う人は疑うでしょう。「見ない信じる人たちは幸いです。」実際ありもしないことを信じさせるために、都合のよい言い訳にしているのではないか。なんと罰当たりな言い方だろうと腹を立てる方もいるかもしれませんが、教会の外の人から見れば当然の疑問です。この疑問に対してどのように答えることができるか。

よく読んでください。その辺りは聖書は抜かりはない。何も疑わずにとにかく信じろと言っているのではない。主がよみがえられたことを私たちは肉の目で見なくてもちゃんと分かるような仕組み、それも理屈が通るような仕組みを神は用意してくださっていた。

聖霊は誰から来ると書いていますか。御父からです。御父のもとから私たちに聖霊が下される。でもそこにイエス・キリストが関わっておられることに注意してください。イエスが御父から受けてというワンクッションはいる。御父からイエスへ、そしてイエスから私たちへという順番です。イエスが天におられる御父のそばにいなければ聖霊は降りません。そうすると、もしイエスが死んだままでよみがえられることがなかったとしたらどうなるか。当然のことながら、天の御父の右に上げられることはありません。したがって聖霊は降りません。しかし、聖霊が降ってくださり、みなさんひとり一人のうちに住んでくださっている。このことによって主がよみがえられたことが証明されるようにできている。

３）聖霊の働き

とはいっても、聖霊が私のうちに本当に住んでくださっているのだろうかと不安に思うことはあります。なにしろ、聖霊なる方は恥ずかしがり屋ですから、いつも陰に隠れて目立つようなことはなさらない。でも、聖霊は働いておられる。みなさんが今朝教会の礼拝に集っておられるのはどうしてか。なぜ、私たちは主を信じる事ができるのか。振り返ってみたら、私が困ってどうしようかと迷っていたときに、偶然にしてはできすぎのような不思議な出来事が起きたり、人が与えられたりしたのはどうしてか。暗闇のなかで迷っていたときに光が与えられていったということがあります。あれはな

んだったのか。もし信仰がなかったならとっくの昔に絶望してどうなっていたかわからない、そんな苦しみのときでも祈って耐え忍ぶことができたのはどうしてか。すべて、聖霊が私のうちに働いておられたではないか。もし聖霊がおられなかったら、私たちはとっくのむかしにキリストから離れて信仰を捨ててていただろうと思います。そういうことを見ていくと、聖霊はおまけですとはとても言えなくなる。こんなたいせつなものはない。

アポロがプリスキラとアキラから聖霊について教えてもらったときどう思ったでしょう。アポロは、自分が力強く福音を語るという自覚はしていても、その力はどこから来るのかわかっていなかった。けれども今初めて聞いてわかった。自分は救われたとき聖霊をいただいていたのだ。霊を燃やしてくださっていたのは、主であったと知りました。

３　聖霊によって

１）アカイア教会へ手紙を書いた

アポロの働きが聖霊の働きそのものであったこと教えられて、次に彼はエペソからギリシャの南に位置するアカイアに渡って行くことにしました。しかしパウロもギリシャでは大変苦労したように、アポロもユダヤ人からの迫害を受けることは予想されます。そこでエペソの教会はあらかじめ手紙で、アポロのことをよろしく楽しみますと書いて送ることにします。その結果、アポロがどのように働いたかは28節に書かれているとおりです。

２）神の御国

パウロが教会を開拓した最初の頃は、自分たちのことだけで精一杯で他の教会の事までは考える余裕はありませんでした。でも、いまや教会どうしが助けあうようになるまでに成長してきていることが分かります。

主が注いでくださった聖霊は、ひとり一人のうちに働いてアポロのように福音を語る力を与えてくださいます。プリスキラとアキラのように、兄弟を励ます働きもする。27節に「兄弟たちは彼を励まし」たとあります。悲しんでいるなら慰めあい、罪を犯したならば互いに戒めあい、病む者がいるならば祈りあう。それが聖霊の働きです。その真ん中に主が立ってくださいます。このようにして聖霊は教会を成長させ、そして今度は教会と教会の交わりのうちにも働かれて、神の国が建てられていく。このような聖霊を私たちもいただいています。そのようにしてくださった主とともに歩んでまいります。